

イスラエルの反シオニスト議員

「私は決して降伏しない」

オーファー・カシフ（クネセト議員）

MR オンライン 2024 年 11 月 30 日)

<https://mronline.org/2024/11/30/anti-zionist-israeli-mp-i-will-never-surrender/>

今月初め、イスラエルのクネセトはオーファー・カシフ議員の「組織的な行動パターン」を特定した。彼はユダヤ人で、2019 年からクネセト（120 議席）内で 5 議席をもつ共産主義主導の連立会派ハダシュ（平和と平等のための民主主義戦線）の代表を務めている。イスラエル政府に対する南アフリカによる国際司法裁判所（ICJ）提訴を支持したことや、ヨルダン川西岸地区でイスラエル占領軍に抵抗するパレスチナ人を「自由の戦士」と呼んだことをめぐり、『倫理委員会』の査問をうけた。

その結果、彼は「（イスラエル）兵士に対する流血を奨励」し、ジェノサイドの申し立てに対抗するイスラエル国家の「能力を弱体化」させた罪で有罪とされた。6 か月の停職処分は彼を黙らせる一番最近の処置で、今年初めには前例のない弾劾の標的にされた。弾劾決議はわずかな票差で否決されたものの、2023 年 10 月には 45 日間の停職処分をうけた。

『倫理委員会』の裁定者たちは、カセフと彼の『体系的な行動パターン』について間違っていなかった。59 歳の彼は、成人してからずっと、パレスチナ人の占領と支配にひるむことなく反対し、第一次インティファダの際は、兵役を拒否した最初のイスラエル軍兵士となり、これまでに 4 回の実刑判決を受けた。

この週末、ロンドンのマルクス記念図書館とインドのYMCAで大勢の聴衆を前に講演を行ったヨーロッパ講演ツアーで、『トリビューン』誌副編集長のマーカス・バーネットはカシフに会い、イスラエルのファシズムへの転落、社会主義者への弾圧の現状、そして彼自身の希望の源泉について話し合った。



マーカス・バーネットです：まずあなたの経歴から話を始めたいのですが、あなたは1960年代初頭にレジオンに生まれ、労働者シオニストの家庭に育ちました。ナハールで兵役を終えましたが、1987年の第一次インティファダの際、政治的理由で召集命令を拒否しましたね。

オーファー・カシフ：おっしゃるように、私は古典的な労働シオニストの家庭に生まれました。私の父は労働運動家でした。私が社会意識を持ち始めたとき、自分の考えがより左寄りであることに気づきました。まだ14歳かそこらでしたからそれほどしっかりした明確なものではありませんでしたが、15歳になって左翼青年運動に参加しました。まずシェリ [左翼陣営] に入りました。その後、最も左翼的とされる青年運動ハシュマー・ハツェアに参加しました。

MB：「マルクス主義シオニスト」の青年運動ですね。

OC：ええ、そのようなものです。マルクス主義シオニストなんて今となっては言葉に矛盾があることは理解しますが、15歳か16歳のときはわかりませんでした。気がついたらそこにいたんです。ナハールでは兵役とキブツの両方の

仕事をするグループにいました。空挺旅団にいたこともあります。兵役を通じて、私は次第に左派に傾いていきました。

兵役を終え、最初の学位を取るために大学に進学したとき、第一次インティファダが始まりました。私はガザ勤務の予備役として召集されたのですが、拒否しました。その間に投獄された最初の兵役拒否者になりました。釈放されたとき、共産党を基盤にした連合体のハダシュに参加し、シオニストの洗脳から抜け出すプロセスを始めたのです。

私は自分自身を子供時代から青年期を通じてうけた洗脳の犠牲者だと考えました。社会主義、ヒューマニズムとシオニズムの間には大きな矛盾があることがわかったのです。そして進む道は社会主義であると決意したのです、シオニストでない人間的な社会主義です。社会主義者としてのこの基本的な信念からシオニストでないというだけでは不十分で、反シオニストなければならず、シオニズムのイデオロギーと実践に積極的に反対しなければならないと決心しています、

占領地での兵役を拒否したという同じ理由で、私はさらに3回、合計4回も投獄されました。再び投獄される前に、私はイギリスで博士号を取得するために勉強するという申し出を受け入れたのです。

MB：この頃、あなたは世界的な共産主義運動とイスラエルの歴史でユニークな人物だったミール・ヴィルナーの議会補佐官として招かれましたね。

OC:それは第一次インティファダの時期でした。彼はその後も政治活動を続けていましたが、クネセト議員としての政治的キャリアの終わり頃でした。ソ連崩壊直前の1年間だけ彼の下で働きましたが、当時はイスラエル共産党を含め、世界の共産主義・社会主義運動に多くの変化が起き、同志たちにとって非常に厳しい状況でした。分裂や陰謀がありましたが、それはこのような激震の後では当然のことでした。

でも、ミールとの仕事が魅力的だったことは確かです。22か3の若いころでしたから感激していました。彼は多くの歴史的な出来事を経験しているので、そんな歴史もつ人と仕事するのはとってもスリリングでした。彼はイスラエル建国の以前、1948年からクネセットの議員だったのです。

ミールは多くの重要人物-善人も悪人も-を知っていました。世界中の共産主義指導者を知っていました。イスラエルの指導者たち、シオニストの指導者たちとも知り合いました。当然私は彼らに恨みを抱いていますが、それでも彼らの影響力を無視することはできません。ですから彼が個人的に経験した歴史の話を知るのには、とても魅力的でした。これ以上の経験は妻と一緒に暮らすことだけだと思います。

MB : お墨付きをもらったのですね。私がミール・ウィルナーのことをだしたのは、彼がイスラエル政治における反人種主義、反シオニストを実践した人だったからですが、大きな影響力を持つことはなかったとはいえ、当時のイスラエルは彼らにたいして今よりも寛容であったように思われます。それが近年では社会に地殻変動が起きて、大量虐殺マニアに陥っているように思えます。

OC : 考えるだけでなく真実を伝えたいと思うなら、そう言うべきです。残念なことに、私は真実を語ったためにクネセトから停職処分を受けました。しかし、それが真実なので、本当に残念なことです。

ミール・ヴィルナー自身、1967年の占領に反対し、パレスチナ国家の即時樹立を訴えたことで命を狙われ、重傷を負いました。刺されたのです。彼を殺害しようとした人物の裁判で裁判官が、（ヴィルナーは）ナイフで肺が裂けなかったのは幸運だった、と言っていたのを覚えています。

同志たちは常に深刻な脅威にさらされていたのです。私たちよりも楽な時代だったとは言えません。しかし、マクロレベルで見れば、そうです。ハダシュが、ユダヤ人とパレスチナの真の深いパートナーシップを追求してきた唯一の議会運動であることを強調しておく必要がありますが、いまは、とりわけハマスによる10月7日の殺戮のあとでは人気は落ちています。

MB : 左翼に対する弾圧はどの程度激しいのでしょうか？

OC : 私たちは毎日迫害を受けています。警察は最近、ハイファにあるハダシュのクラブを10時間閉鎖し、映画の上映や虐殺に反対する集会を開くのを妨害しました。（10月7日の）大虐殺後の最初の数カ月間、イスラエル国内のパレスチナの都市や村でデモを行うことは完全に違法になりました。占領地ではなく、イスラエル国内で完全に禁止されたのです。多くの同志たちが、ソー

シャルメディアへの投稿やツイートだけで逮捕され、取り調べを受けました。ジェノサイドへの反対を表明しただけで職を失い、学生は退学処分を受けました。

しかもこれらは氷山の一角です。近々提出される法案では、ハダシュや他のアラブ政党の選挙参加が禁止されます。イスラエル市民の20%が投票先のリストを持たなくなるのです。被選挙権だけでなく、人口の5分の1の人たちの投票権が廃止されるのです。

イスラエル国内でも、イスラエルをファシスト独裁国家に変えるプロセスが着々とすすんでいます。私たちはすでにそこにいるのです。民主主義の可能性のかけらさえもなくそうとしている100以上の法案や法律のリストがでているのです。

私たちがその主な標的になっています。なぜなら、ネタニヤフ首相やその閣僚たち、そしてファシストたちは、パレスチナ人の抵抗よりもユダヤ人とパレスチナ人のパートナーシップという大義を恐れているからです。彼らは、パレスチナ人を民族として破壊する作戦の一環として、その大義を破壊し、すべての市民権を排除し、イスラエルを明確な独裁国家に変えようとしているのです。

私が他の同志より前に停職処分を受けたのは、連合会派ハダシュのなかで唯一人のユダヤ系議員だからなのです。ハダシュの5人の議員の中でユダヤ人は私だけなので、彼らは特に私を標的にしたのです。

MB : 西側諸国の多くの人々は先日のゼネストの試みをネタニヤフ政権にたいする広範な大衆蜂起の企てと見ていましたが、うまくいかなかったようです。イスラエルの市民社会の可能性について疑問が投げかけられています。

OC : 2つのことを言わなければなりません。第一に、イスラエルの労働者のほとんどは組織化されていないことです。説明に何時間もかかる膨大な歴史があるのですが、イスラエルの労働者階級の歴史は非常に嘆かわしいものです。最大組合のヒスタドルートは、常にシオニストで、階級闘争よりも国家建設に力を注いでいました。1960年代まで、アラブ人はヒスタドルートのメンバーにはなれませんでした。イスラエル建国後、追放や虐殺から免れたパレス

チナ人は、1966年まで軍政下にあったとはいえ、イスラエルの市民になっていたのですが、ヒスタドルートに加入することは許されませんでした。

このことをいうのは、反動組織のヒスタドルートが、政府が10月7日以前から進めてきたファシスト・クーデターに対してなぜ何もしなかったのか、その背景を分かってもらうためです。ネタニヤフ首相は「司法改革」という甘い言葉で、イスラエルをファシスト独裁国家に変えようとしていました。改革自体が目的ではなく、占領地のパレスチナ人を併合し、追放し、支配し、殺すという【極右大臣】スモトリッチの計画を実現するための手段でした。

だから彼らはクーデターに対して実際には何もしなかった。ストライキを起こすのに何カ月も何カ月もかかりました。法律では、労働者組織は労働条件に直接関係する理由でしかストライキができません。ヒスタドルートはクーデターや政府の怠慢、人質の犠牲を理由にストライキを行うと発表しましたが、その時点で違法でした。だから裁判所はストの中止を命じたのですが、これはあらかじめ計画された大失敗でした。

MB：組織化された労働者からの効果的な圧力がなく、イスラエルに無制限に注ぎ込まれているアメリカの援助が、エイラート港の財政破綻のような大きな問題を緩和できるとしたら、潜在的な変化のビジョンはどうなるのでしょうか。将来の爆発の資源はどこから来るのでしょうか。

OC：3つの要素が組み合わさっているのでしょうか。まず、国中で常にデモが行われていること。10月7日以前は（ネタニヤフ政権による）クーデター反対でした。その後は、大量虐殺反対ではなく、人質に対する政府の対応に反対するようになりました。人質たちがネタニヤフと政府によって故意に犠牲にされたからです。

私たち共産党やハダシュ、そして反ジェノサイド運動は当初から、特に人質の犠牲をめぐる大規模なデモで人質の解放を求めるスローガンを掲げてきましたが、同時に、現在進行中のガザの状況をジェノサイドと呼ぶべきものだと訴えてきました。

私たちはそれをやめるようよびかけています。それが人質を解放する唯一の方法だからですが、それだけではなく解放のよびかけを支持しています。私た

ちも人質の家族や殺害された家族の何人かと親密な関係にあります。もちろん全員ではありませんが、多くは政治的に私たちとかなり親しい人たちなのです。犠牲者の何人かは10月7日以前から、ハダシュや反占領運動とかかわっていました。ハマスに殺された人のなかには、私たちと関係のある個人的な友人もいます。

ですから街頭でもっと多くの人にあう必要があります。毎週土曜日の夕方、時には平日にも、全国で何千人もがデモに参加しています。私たちには数百万人が必要ですが、なかには恐れている人もいます。そうした闘いに参加したために解雇されたり、学生としての居場所を失ったり、警察の暴力に直面したりした人もいるからです。

第二の要素は、国際的な圧力が必要だということです。ICCの逮捕状は大きな前進で非常に重要だと思います。ほとんどの野党はICCや国際社会に反対してネタニヤフ首相の味方をしています。いわゆる「ネタニヤフ代替」も含まれます。

ICCの（逮捕状発出）を明確に支持して公式声明をだしたのはハダシュだけです。私は個人でもICCを支持するとソーシャルメディアに投稿しました。ICCの決定を尊重する国々が同じように態度表明すれば事態を劇的にかえられるかもしれません。国際社会がイスラエル政府に圧力をかけることが必要です。大量虐殺を終わらせ、人質を解放し、ガザを復興させ、占領を終わらせ、パレスチナの独立国家を樹立させるためには、それがどうしても必要です。

第3の要素は、本当の意味での議会野党を持つことです。我々以外に野党は存在しません。野党にいるのは、リーバーマンのような狂信的なファシストだけではありません。不人気になることを恐れて、大量虐殺を行う政府に異議を唱えることを恐れている臆病者もいます。このような卑怯者の代表格であるラピッドやガンツに代表される、基本的に右派と言わざるを得ない人々もいます。彼らはファシストとは言いたくないが、右翼で臆病者です。

この3つの要素が必要です。そのうち現状では、最も簡単な要素は国際的な圧力です。例えば、イスラエルをボイコットする、イスラエルへの武装をやめる、ICCの決定を尊重する、などといった真の国際的圧力があれば、それは

間違いなく現在進行中の状況に影響を与えるでしょうし、反ジェノサイド派を支持するイスラエル人の絶望感を減らすことができるかもしれません。

ハダシュではすでに、反占領、反戦、平和、人権など 60 以上の団体との連合を形成することに成功しています。しかし、我々には国際社会が必要です。真の国際的支援がなければ、遅かれ早かれ私たちは負けることとなります。パレスチナ人の大量虐殺や死者がさらに増えるだけでなく、地域戦争やイスラエル国内での内戦、イスラエルの街角での血の川が流れる深刻なリスクもあります。それも時間の問題です。

MB : これは新たな懸念のようですが、イスラエルの現在の進路は非常に不安定で、内部紛争へ陥る明らかな可能性があるのですね。最近、パレスチナ人囚人をレイプする権利をめぐる、武装したイスラエル人の群衆が軍と物理的に対峙する場面がありましたが、それを見ると、そう考えてもおかしくないと思います。

OC : イスラエルにはもう警察はいない、ということから始めましょう。もちろん、警察も他の機関と同様、支配階級に仕えています。ですが、かつては人民のために奉仕するという建前がありました。上層部、とりわけ警察高等弁務官は、政府全般と、超ファシストで人種差別主義者のイタマール・ベン・グヴィール、いわゆる『国家安全保障』担当大臣に完全に傾倒しています。彼らは個人的にも彼に仕え、コミットしています。警察官一人ひとりがファシストだというわけではありませんが、組織としては、もはや市民のためには役立っていません。政府とベン・グヴィールに仕えているのです。

2 つ例を挙げましょう。あなたが挙げたのはそのうちの 1 つです。イスラエル兵がパレスチナ人拘留者を拷問したことが騒動になったわけではありません。パレスチナ人がイスラエル兵にレイプされ、重傷を負ったという具体的な事件があったのです。憲兵隊は通常行わない捜査を始め、容疑者を逮捕するために軍事基地に入りました。そこに着くと仲間の兵士たちが憲兵隊の連行を阻止しようとした。それでもまだ足りないと、ファシストの暴徒が基地に入り込んだのです。その中には少なくとも 1 人の大臣とクネセットの議員も含まれていました。

この基地の憲兵たちは、警察に応援を求めましたが、警察はきませんでした。ある新聞が後に、ベン・グヴィールの秘書が行くなと言ったからだと報じました。彼らは強姦容疑者を守るためにイスラエル兵を犠牲にしたのです。同じ日、別の暴徒が（またもやクネセットの議員を伴って）軍事裁判所に侵入し、容疑者を捜査している者たちを攻撃しようとしてしました。このときも、警察は手遅れになるまで駆けつけませんでした。イスラエル警察と呼ばれる民兵組織のファシスト的な姿勢を示すものです。

なぜファシズムなのか。ファシズムに関する最も重要な学問的専門家の一人に、私の恩師であるゼブ・シュテルネルがいます。彼はかつて、『ファシズムは、人々が互いに打ち合い始めたときに始まるのではなく、国家の体制が右派に比べて左派を差別し始めたときに始まる』と書いています。ファシストの関係者は好きなことを何でもできるのです。法律はありません。

占領意識がパレスチナ占領地からイスラエル国内へ侵入するのは、ほとんど自然なことです。パレスチナ人が入植者に襲われたり、殺されたりしても、警察は捜査も逮捕もしません。数カ月前にイスラエルの軍事基地に侵入した者たちは、いまだに捜査も逮捕もされていないのです。

その一方で、虐殺に反対し、政府に反対するデモ隊は、まったく同じ警察が残忍に攻撃します。人質家族のリーダーとして最も有名なのは、おそらくアイナフ・ザンガウカーでしょう。彼女は素晴らしい女性で、もともとはネタニヤフ首相の支持者でした。とても情に厚く、賢く、勇敢な女性で、私は彼女を尊敬しています。

彼女とその娘は、デモのたびに意図的に警察の標的にされています。娘は馬に追いかけられ、逮捕され、殴られました。この扱いを、軍事基地に侵入した右翼の暴徒に対する警察の扱いと比べてみてほしい。

私の議員停職処分は、もう一つの例です。私は発言したことで6カ月の停職処分を受けました。免責を受け、多くの国民を代表するはずだでした。私の弾劾決議には4票足りませんでした。クネセットと政府双方の法律顧問によれば、弾劾動議には90票が必要ですが、私の場合は賛成が86票だったのです。

それでも彼らは私に反対しました。弾劾に失敗すると、停職処分にしたのです。理由は、ジェノサイドをそう呼ぶべきであると主張し、ICJ への南アフリカの訴えを支持する請願書に署名したこととされました。

イスラエルでは、ジェノサイド、民族浄化、戦争犯罪、残虐行為、占領、パレスチナ人への迫害と並んで、ファシズムが法制化され、市民への迫害、逮捕、殴打などによってますます強くなっています。イスラエルは本格的なファシスト政権になろうとしているのです。

MB : 希望を与えてくれるものは何ですか。

OC : 私が座右の銘としているアントニオ・グラムシの言葉のひとつに、「社会主義者は、知性のペシミズムと意志のオプティミズムにしがみつかなければならない」というものがあります。これは抽象的なスローガンではなく、現実的な指針です。絶望的になるのはとても簡単ですが、そんな特権は私たちにゆるされません。

朝、目を開けると深い絶望感と悲観に襲われます。しかし数秒かけて、文字通り、そして比喩的に目を覚まし、闘争に邁進するのです。そうせざるをえないのです。

もっと個人的なことを言えば、私は現在進行中のガザの状況をホロコーストにたとえることはしません。1930年代にドイツで起こったこととは比較しますが、1940年代に起こったこととは絶対に比較しません。今後も、この2つが例えられることがないことを願っています。

でも、母方の祖父母の家族はみんなナチスに虐殺されました。全員が殺されました。戦前にポーランドを離れた私の祖父母を除けば、誰も生き残れませんでした。もし、このような犯罪に対してもっと多くの人々が声を上げていたら、どうなっていたらとよく自問します。もしかしたら、私の家族を含む何百万人もの人々が救われたかもしれない。

まるで祖父母の家族が私に語りかけてくれているかのようです。それは私に希望を与えてはくれませんが、あらゆる代償を払ってでも闘う意欲を与えてく

れます。 それ以外のことはできません。これは社会主義的で人道的な命令ですが、家族の命令でもあるのです。

私は希望を持っています。 それを実現できるかどうかは分かりません。でも、私たちが勝つことは分かっています。 それは抽象的でも子供じみた希望でもなく、歴史から学んだことです。ネルソン・マンデラが南アフリカ大統領になることをわずか数カ月前に、誰か信じたのでしょうか。アメリカ南部のクー・クラックス・クランがほとんど無に帰すことができると、当時誰かが信じたのでしょうか。

誰も信じられないような多くの変化が起きました。それが私の希望の一部です。しかし、もし私たちが闘わないのであれば、希望はありません。先に述べた3つの原則に基づいて、正当な闘いを続け、拡大していけば、変化は訪れる。それが私の希望です。

イスラエル社会は私の社会でもあり、私は私の社会を公正なものにしたい。これは闘いの一部です。彼らは私たち、特に私を黙らせようとしています。私たちを反イスラエル、反ユダヤ主義者、そして私個人を自己嫌悪のユダヤ人と中傷しています。これらの嘘はすべて、彼らが私たちを黙らせたいからなのです。そして私たちを迫害するのは、私たちに現実を修正する真実を語ってほしくないからなのです。私は決して降伏しません。

オーファー・カシフはイスラエルの政治家。イスラエル国会（クネセツ）のハダシュ代表。

マーカス・バーネットは *Tribune* の副編集長。

原文：[トリビューン](#) 2024年11月28日

<https://tribunemag.co.uk/2024/11/anti-zionist-israeli-mp-i-will-never-surrender>